本学教員が関わった本

世界の暦文化事典

中牧 弘允 編
丸善出版、2017年11月

紹介者　福　井　栄二郎
（法文学部 准教授）

文化人類学者がフィールドワークを行う際、最低でも連続１年は現地に滞在しろといわれる。なぜか。どの文化も暦が１年ほどで１周するからである。つまり人間は１年をサイクルとして、同じ生活を繰り返し送っている。

2017年に『世界の暦文化事典』が刊行された。これは世界各地の暦に特化したユニークな事典だ。本書は９つの章から構成されていて、東アジア、東南アジア、南アジア、中央・北アジア、西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オセアニアとなっている。つまり順を追って読むと、日本を起点に西回りで世界一周暦の旅を楽しむことができる。

暦法には大きく太陽暦、太陰暦、太陰太陽暦の三種がある。また花の開花、渡り鳥の飛来、そして雨季乾季などを指標とする自然暦もある。太陽暦は太陽の運行（地球が太陽の周りを回る周期）に基づいた暦で、私たちにとって最も身近なグレゴリオ暦は、この太陽暦である。一方、太陰暦は月の満ち欠けの周期に基づいた暦である。現在では、イスラム暦（ヒジュラ暦）がその代表だろう。また太陰太陽暦は、太陰暦を基本として、そこに閏月を入れながら調節する暦である。中国の太陰太陽暦などがこれにあたり、19年に７回の閏月を入れて、暦と季節のずれを修正している。

こうした暦の上に、祝祭日や年中行事が据えられ、生活のリズムがつくられる。祝日はクリスマス、イースターなど宗教に由来するものもあれば、独立記念日など、特定の国家が制定するものもある。例えば日本の場合、「文化の日」は明治天皇の誕生日（天長節）、「勤労感謝の日」

は旧新嘗祭、「昭和の日」は昭和天皇の誕生日に、それぞれ由来している。年末年始の休みが長いのも日本だけの特徴で、キリスト教国ではクリスマスに、中国などでは春節（旧正月）に重きが置かれるので、年末年始はそれほど重要ではない。

本書のなかで、私は長年調査してきたバヌアツ共和国の項目を執筆した。この国独自の祝日として、例えば独立の父「ウォルター・リニの日」（２月21日）とか「伝統的チーフの日」（３月５日）、「独立記念日」（７月30日）などがある。またこの国はキリスト教国なので「聖金曜日」「復活祭（イースター）」「昇天祭」「聖母被昇天祭」「クリスマス」なども祝日として制定されてい る。こうした祝日には、首都で大がかりなパレードやイベントが行われることもある。

また暦は商品にもなる。美しい風景や伝統的な踊りの写真で彩られたカレンダーは、バヌアツの人気のお土産品だ（写真）。観光客は持ち帰ったカレンダーを眺めることで、楽しかった旅の思い出にふけることができる。悲しいことだが、お土産用カレンダーにおいては、暦の確認は二の次となってしまう。

他方、バヌアツの離島や村落部に暮らしていると、大切なのはむしろ自然暦の方かもしれない。彼らはみな、タロイモやヤムイモなどを栽培する農耕民である。焼畑を耕作するためには、乾季から雨季への移り変わりを正確におさえておかなくてはいけない。また沿岸にトビウオの群れが舞い込む季節や、ウミガメが産卵する季節も重要だ。天気を読むことや季節の変化に気づくことは、彼らの生活には不可欠な能力である。彼らは日常生活のなかで、上手にグレゴリオ暦と独自の伝統的な暦を使い分けている。

この暦の複数性は、なにもバヌアツに限ったことではなく、日本に目を向けると「和暦」という独自の紀年法がある。もうすぐ30年以上続い

バヌアツの土産用カレンダー

た「平成」も終わろうとしており、新しい元号は「大化」以来、248番目の元号となる。「明治」「大正」「昭和」「平成」といったこの元号、日本人にとっては単なる時間の区切りである以上に、実は「時代」そのものではあるまいか。「昭和」といえば、第二次世界大戦から戦後復興、高度成長というこの国の一大転換期であったし、「大正ロマン」「平成の歌姫」など、その時代時代にうまくマッチした文化・風俗が存在した。グレゴリオ暦では、なかなかこうはいかない。

一方で、今、世界はグローバル化し、私たちの身近に外国人がいることはもはや珍しいことではなくなった。私などは、どうしても隣人たちの習慣、風習に関心が湧く。中国の方々が盛大に祝う「春節祭」や、イスラム教徒たちの断食月「ラマダーン」などは、テレビなどで認知度も高まったが、これらもまた彼らの暦と密接に関連している。つまり彼らは日本で生活しながら、同時に別の暦を生きているのだともいえる。

この国にも、彼の地にも独自の生活実践があり、その一つ一つが独自の暦と結びついている。今、この瞬間に、異文化の人たちはどのような暦を生きているのか。私たちのものとは異なる暦を想像してみるのもまた楽しいだろう。本書はその大きな手助けをしてくれるに違いない。